

境界に住まう

—高齢者施設における街との関係性、多様性の空間と自立システムの提案—



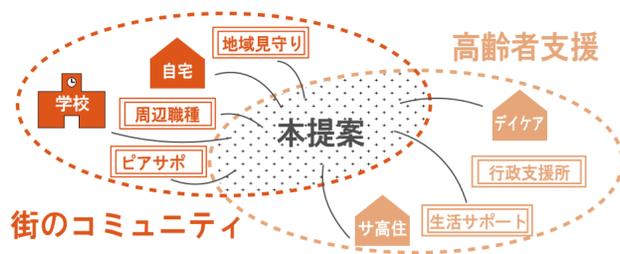
[01] 高齢者がいきいきと暮らせるには

現在、多くの高齢者施設では、利用者が施設内に閉じこもりがちとなり、地域住民との交流が減少している。また、入所した瞬間から支援を受ける側として位置づけられ、主体性や役割を持ちにくい状況が生まれている。そこで本提案では、施設と街との境界を取り払い、双方が日常的に交わることのできる環境を整える。



[02] 自立できる場の提供

街と施設の境界を取り払い、日常的に地域住民と交流できる環境を整えることで、街からの生活サポートを柔軟に受けられると同時に、高齢者自身が持つ経験や技能を発揮し、地域へ貢献できる機会を創出する。これにより、高齢者が「支援される側」だけでなく、「支え合う仲間」として街と関わり、自立を継続できる場所としての新たな施設像を提示する。



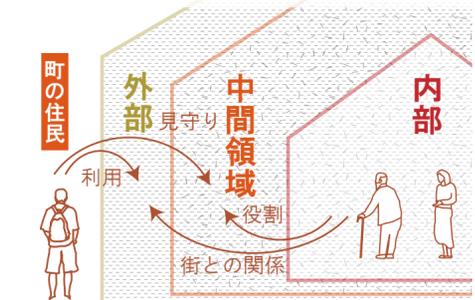
[03] 周辺による自立システム

計画地は、工場やオフィスが混在しつつ、公園や学校、飲食店も集積する、多様な活動が交錯するエリアに位置する。こうした立地を活かし、飲食や清掃、アート活動など、地域と自然に関わりを持てるプログラムを取り込み、高齢者が街の人々と日常的に交流しながら役割を発揮できる環境をつくる。障害や年齢に関わらず、活動を共有し、仕事や趣味を介したつながりが生まれる拠点をめざす。



[04] 壁という境界を曖昧に

■ 境界の開放性
CLTを用いた壁体をあえて積層的に配置することで、物理的な境界でありながらも透過性と開放性を兼ね備えた環境をつくり出す。内側から外側に向かって段階的なレイヤーを形成することで、高齢者の日常が自然と街へとしみ出し、地域との関係性が生まれる建築とする。



■ CLT 壁による境界性
CLT 壁の多様な開口性を活かし、内外をつなぐ関係性を生み出すとともに、活動や暮らしが外へとしみ出す滞在性のある環境を形成する。

